

令和3年山盛苑お屠蘇の儀 挨拶

令和3年1月5日 施設長 宮下正弘

皆さん、新春のお屠蘇はいかがだったでしょう。

今日は日本酒の方は17名、そのほかの方は甘酒、りんごジュース、まめびよ(豆乳)でした。とても皆さんのお顔が新春らしく、輝いて見えました。施設では通常アルコールは飲めませんが、年1回、この日だけは楽しんでいただいています。来年を亦楽しみにしてください。昔から年越しの魚(肴)は骨になり肉になり、新春の屠蘇酒は血になるといいます。俳人で文化勲章の加藤楸邨(しゅうそん)はこんな句を詠んでいます。

「 屠蘇くむや流れつつ血は蘇る 」

屠蘇のそは「蘇る」ですね。流れつつ血は蘇る、淑気を感じさせますね。

屠蘇の起源は嵯峨天皇の時代、唐の博士蘇明という人が来朝の折に、絹の袋に入れた屠蘇白散を献上、これをお神酒に浸して元旦より三が日用いたのが始まりとされています。その年の邪疫症魔を除き幸せの年を迎えるとして、その後国民もこれに倣ってお正月に屠蘇酒を頂くようになったといわれています。こんな句もあります。

「 家族みな揃うしあわせ屠蘇に酔ふ 多歌司 」

どうか皆さん、また来年ここに集ってお屠蘇を楽しめるように、今年一年息災で過ごしてください。

以上令和3年お屠蘇の儀の締め挨拶といたします。